

世界の「相対性」を知れ

岩崎葉子

に「何が重要な事実か」を、彼自身の価値観と倫理と展望とに照らして選び続けなければならぬのである。

社会科学のように現在の問題を取り扱う場合、存在するすべての情報を利用することは不可能であるから、カーの教えはいっそう深刻である。自分の扱うデータそのものがすでに恣意性の権化であるという自覚は、これから研究を始めようと考えた矢先に私が背負わされた途方もない重荷であった。

しかし書物の世界は豊潤にして慈悲深い。カーに与えられた悩みの重さに耐えながら、自分がフィールドワークで集めてくるデータの意義について自問自答する私に、それでもやはり研究は楽しいものであると思ひ出させてくれた本がある。それが『旧事諮問録』だ。今日のように「オーラル・ヒストリー」などと大仰に持ち上げられる以前から、日本には大量の「聞き書き」文献が残されている。なかでも断然おもしろい『旧事』は、帝国大学の「史学会」関係者による旧幕臣に対するインタビューの様子を速記したもので、明治二四年から二五年にかけて史学会の機関誌『史学雑誌』に

研究に役立つ本は無数にあるが、ある論文を書くために一時期は穴があくほど見つめ、読み込んだと思うものほど今となっては不思議とよそよそしい。心に残るのは、論文には「使えない」本である。使えないというのは無益だという意味ではもちろんなく、むしろその本が、自分の茫とした世界観を絶えず問い直せと迫るものであるせいかと思う。

そうした本のうち、まだ学生の頃に出会った一冊がE. H. Carrの『What is History?』である。英国の歴史学者カーがいまから五〇年あまりも前に行った大学の講義録をまとめたものだ。

「正確さは美点ではなく義務である」というハウスマンの言葉を引きながら、歴史学者が史実に忠実であることは必須だが、それだけでは歴史学の本質的な機能を果

たすことはできないとカーは語る。「何が歴史的な事実であるか」

を決めるのは事実そのものではなく歴史学者その人であるというカーの教えは、広大な情報の大海からデータを拾い出す社会科学の研究者にとっても、避けられない現実をつきつけている。カーは一九世紀的な楽観主義に彩られた「事実」崇拜の歴史学が、歴史学と歴史学者を否応なく規定する時代の制約と、「事実」は選びとられるという恣意性の問題に真正面から取り組まなかったことを批判する。

カーは、歴史学者は常に「なぜ(それが起こったか)」を考えなければならず、彼が見つけ出す複数の原因の間に優先順位を付けなければならぬ、と説く。そこにはかならず価値判断が含まれる。歴史学における解釈は価値判断と切

り離すことはできない。

このような重い課題を負わされた読者は、不安に突き落とされながらも、どこかに研究の客観性とか普遍的に重要な事実群が存在しているかとカーが言ってくれることを期待するが、そうはならないのである。彼は「自身の取り組むテーマに関連して知られている、あるいは知り得る事実すべて」を正確に利用すべしと諭すのみ。ロシア革命史を専門とするカーは、自身の専門分野でも事実を歪曲した我田引水の解釈があふれたことに憤り、警鐘を鳴らしつつも、なお「歴史的事実は純粹に客観的ではあり得ない」と言い切る。これは、ロシア革命という、おそらくは最も時代の毀誉褒貶に晒されたテーマのひとつに取り組んだ彼の誠実な結論なのであろう。つまるところ歴史学者は、不断に、そして永久

掲載された。この聞き書き作業を始めるにあたって小川銀治郎（史学会書記）は、歴史研究にとつて当該年代の文書が大事ななの言うまでもないが、文書に書かれていることが常に真実であるとは限らない。あることを研究するにあたり、たつたひとつの古書を実証の論拠とするのはなほだ心許ないから、本に書かれていない事実を掘り起こし、これと併せて検討すべきだと述べている。このとき史学会が取り組んだのは、この頃すでに高齢に達しつつあった旧幕臣の生き残りから、徳川時代末期の政治状況や、幕臣たちの業務内容・日課などについて語らせ、書き残すという作業であった。『旧事…』の編纂は、王政復古と内戦、幕藩体制の崩壊の末に成立した明治新政府下のこの時代には、現在よりもずっとセンシティブな政治的問題関心を孕んでいたはずである。未曾有の大改変の直後には「前時代のものは全否定」といった風潮が蔓延しがちだが、史学会の発起人たちはこれに対しあくまでも歴史研究の本領を堅持し、明治維新の混乱によって埋没しかねない「事跡の真相」をすくい上げようとした。

こうした史学者たちの高邁な志によって残された『旧事…』だが、読んでみればどろどろした時代の怨念は露ほども感じさせず、むしろ徳川時代があたかも眼前に甦るように活き活きと綴られている。インタビューは毎回テーマを決め、あらかじめ史学会が準備した質問とともに被調査者を含む数人で行われた。テーマは、たとえば將軍の日常、勘定所や評定所のルーティーンなどで、これらを当時の担当者から直接聞くわけである。質問に答える面々は、「旧幕御小姓頭取」「旧幕外国奉行」、大奥に勤めた「旧幕中臈」、はては「旧幕御庭番」すなわち昔は隠密だったというお爺さんまで登場する！すべて会話のかたちで残されているので「さよう、それは前申す如く」などと被調査者が本當にちょんまげの武士だったことを彷彿させる。御小姓になると親戚つきあいが制限されて窮屈だったろうと質問者が言えば「大した文学（学習）も入らずただ年を経れば自然諸大夫になるというように、つまり株みたようなもの」と正直なコメントをする元御小姓のお爺さん。元中臈が言うには、御台は日に何度も着替えるけれど、衣服を

洗濯することはなく、半年くらいで「御下り」になる。そんなふうでは垢がついていないのか、とぶしつけない質問者にも彼女は「綺麗でございます」と馬鹿丁寧だ。もちろん質問は史学会が思いつきで訊くのではなく、文献に残された史実についてその真偽や細部に關して具体的に確認するもので、幕府の官僚組織の全体像が見えるようにつくりになっている。『旧事…』は昭和に入ってから注目を浴び、徳川時代の制度史研究の貴重な一次史料として知られるようになった。

「歴史的事実」に対する向き合い方は、カーの「なぜポリシェヴィキと正教会の衝突は不可避だったか」のような大上段の問題設定にばかり依拠する必要はない、ということ『旧事…』から教えられた。私はもともとイランのインフォーマルな経済制度の分析や、そのDETAILを正確に描写することに関心があった。ある時代に、人々がどうやって暮らし、どんな仕組みが機能し、そしていったいどんなことが人々にとって大事だったのか。それを当時の空気まですぐ活写することのできる日常生活の「聞き書き」の魅力は、私

がイランの「現在」を写し取っているフィールドワークの将来的価値を少しだけ担保してくれたのである。

『旧事…』の史料価値のみならず、その読み物としての圧倒的な面白さにふつと心が軽くなり、カーの教えも相対化できるようになった頃、もう一冊の良書に出会った。『無限の果てに何ががあるか』は、整数論を専門とする著者が一般読者向けに「虚数」「非ユークリッド幾何学」「集合」そして「無限」といった現代数学の到達点を解説したものである。

しかし『無限…』は、あまたの類書のように、ただ重要な数学的トピックを取り上げてそのものを解説するという内容ではなく、むしろ、数学という人間の営みの意味を問い直すものであった。数は人間が作り出したものである、と主張する著者は、数学が「自然の法則や摂理を発見する」学問であるという見方を否定する。もちろん歴史的にはそう考えられていた時代もあった。しかし複素数や非ユークリッド幾何学の成立は、数学が人間の日常的知覚から次第に離れ、直感では捉えられない論理だけの世界へと発展していく過程

に他ならない。しかも「現実の空間が実数体と同じ構造を持つてい

るとは考えられない」ように、それらは必ずしも我々が生きるこの世界の自然現象とは合致していないのである。これが意味するのは、数学が自然を反映したものでなく、人間の思惟が作り出した壮大な体系であるという事実である。数学における「矛盾しなければ存在するとしても、ちっともかまわない」という基本思想こそが、かのコントロールをして「数学の本質はまさにその自由性に存する」と言わしめた。

人間が生み出したものである以上、数学も時代の制約を免れない。非ユークリッド幾何学が「まったく同時に、しかも独立に、三人の数学者の頭脳に宿った」ことは、それが個人ではなく時代によって生み出された思想であるからだという著者の指摘はじつに的を射ている。また人間そのものの性向から生じる制約もある。著者は「古代の人間ばかりでなく、ニュートンやアインシュタインのような人ですら、安定した宇宙という概念に執着」した、「人間はなぜか、絶対的なもの、安定したものに拠り所を見つけたがる」と人間の保

守性を指摘している。

他方で著者は、「われわれは自然の法則だとか、神だとか、そういう超越的な存在をあてにせず」「絶対真の世界を作り上げようと努力しているのである」と雄々しい。著者は神仏に頼るのはきらいのようだ。しかし数学者たちが思惟の世界において、他の自然科学のような「近似的に正しく実用的な」科学ではなく、「自然の理とは独立な、矛盾のない、しかもすべてを証明することのできる完璧な数学の体系」を求めている心情は、安定した宇宙に執着した物理学者たちのそれと、どこか通底している。あるいは人文・社会科学者が「客観性」や「普遍性」を追求する心情とも、似通っている。完全な論理の世界だけに生きる数学者にとっても、例の「抛り所」願望は抜きがたいようだ。

ゲーデルの不完全性定理によって「現代数学は自身の無矛盾性を証明することができない」という結論を得た数学者たちは、ここでまた「絶対真」を希求してきた前近代以降の数学を見直す機会に直面しているのかも知れない。数学という学問の相対的な位置づけについて『無限…』は多くを語って

いないものの、著者は別の本のかなかで「宇宙のどこへ行っても知的生物は表現こそ違え、みな同じ数学を持つはずだ」と説は、人間中心主義のたわごと」と語っているから、数学は人間という生物の脳が認識する様式の範囲において最大の合理性を追求する学問である、ということなのだろう。

『無限…』を読んで、畢竟、あらゆる学問は混沌とした世界をなるとか秩序立てて認識しようとする人類の努力が作り出した方法論であって、そこに豊かな多様性が存在していると思に至った。だからこそ数学の合理性にすら留保がつく。「客観的な歴史的事実などない」と言い切るカーは、もちろん現代数学の最高峰を極めたわけではないだろうが、奇しくも同じ結論を導き出した。人間の思考を含むあらゆる事物は時空を超越して存在することはできないという歴史学の世界観は、二〇世紀の「科学の時代」を超えて、再評価される時期が来ているようにも見える。

以上の三冊は一見なんの関連もなさそうだが、私の研究者人生に大きな影響と喜びを与えてくれた書物である。自分が向き合う研究

対象と方法論を相対化するうえで、大いに教えられたこの三冊には、共通するいまひとつの特質がある。それは、言語も文体も異なるが、いずれも豊かな表現力と明快な語彙を持っているという点である。

(いわさき ようこ／アジア経済研究所 中東研究グループ「イラン経済制度史」)

《参考文献》

- E. H. Carr [1987] What is History? (Second edition), Penguin Books Ltd.
- 旧事諮問会編「一九八六」『旧事諮問録 江戸幕府役人の証言(上・下)』岩波文庫、岩波書店。
- 足立恒雄「二〇〇二」『無限の果てに何があるか 現代数学への招待』知恵の森文庫、光文社。